

Monthly Clinical News

WHO 「伝統医学」を国際疾病分類に統合へ

世界保健機関（WHO）は6日、東京都内で会見し、日本の漢方や中国・韓国の伝統医学について世界標準化した用語集や分類体系を作成する「伝統医学国際分類（ICTM）」プロジェクトを推進し、2015年の改訂に向けて作業中の国際疾病分類ICD-11にICTMを統合すると発表した。

西洋医学はICDなどの分類体系を用いて、死亡・リスク要因・アウトカムなどを集計できるが、伝統医学にはこうした世界標準がない。ICDにICTMを統合することで、西洋医学と同様の手法で統計情報を収集で



渡辺氏

きるようになるという。WHOは日中韓3国の伝統医学を皮切りに、世界各国の伝統医学についても情報標準を作成する計画だ。会見で厚生労働省大臣官房統計情報部の岩崎修企画課長は「保健医療統計の有用性がますます高まる」と期待感を示した。

ICTMの作成にはiCAT（international Collaborative Authoring Tool）と呼ばれるシステムを使う。世界各国からインターネットを通じてiCATにアクセスし、共同で用語や概念を作成する。iCATを利用することで、作成した分類をテストし

たり、統一された方法で他言語に翻訳できる。同プロジェクトメンバーは、iCATを「Wikipediaのようなものだ」と説明した。

ICTMプロジェクト諮問グループの共同議長を務める渡辺賢治氏（慶應大病院・漢方医学センター診療部長）は、「日本でも臨床現場で既に漢方薬などは使用されているが、どのように使っているのかが見えてこない」と話し、統計的なデータの必要性を強調。その上で、「統計だけでなく、医学教育や臨床研究の基礎にもなる」と同プロジェクトに期待を寄せた。

また、日中韓の伝統医学について

は「共通点が多い」とする一方、「同じ薬であっても適応が異なる場合などもある」と話し、どのようにデータを取るのかも含めて、今後の検討課題とした。

WHO事務局長補のマリー・ポール・キニー博士はビデオメッセージで「標準用語や標準分類を作るといっても、伝統医学や補完代替医療の科学的な有用性をWHOが保証するものではない」とし、ICTMによって伝統医学の安全性・有効性などを科学的に評価するための基盤ができると解説した。

WHOは7日から10日までICTM作成のための専門部会である伝統医学国際分類会議を都内で開催した。